

二〇一六年六月二一日(参加者一三名)

小流れの淀みに屯あめんぼう
 田に透けて平和と見たる蝌蚪の国
 色褪せしバラと見たれど香を放つ
 菖蒲田の余白に映る空ま青
 木道に立ちては屈み菖蒲撮る
 垣根よりぬつと顔だす濃紫陽花
 植田なる水面をよぎる雲白し
 達筆でよめぬ碑木下闇
 青空を蹴りては進むあめんぼう
 雨粒の真珠びかりす花菖蒲
 雲切れて青空のぞく青嶺かな
 昨夜雨を湛へて園のバラ薫る
 昼暗き樹間の径の濃紫陽花
 蝌蚪生れて尻振りダンス始めけり
 堀のなき農家の庭や立葵
 水位計梅雨の出水のここままでと
 葭切の囃す猪名野の水難碑

ひかり

ひかり

ひかり

ひかり

ひかり

満天

満天

満天

満天

わかば

わかば

わかば

わかば

うつぎ

うつぎ

うつぎ

青田風四方より通ふ水難碑
よう子

バラ園の朽ちしベンチに推敲す
よう子

行々子立ち入り禁止札の辺に
よう子

太陽が笑顔に見ゆる梅雨の晴
よし子

水すまし川遡ること進む
よし子

木道に沿ひし小流れ梅雨濁り
よし子

流されてまた遡る水馬
なおこ

おにごつこ否虫獲りの行々子
なおこ

水害碑隣る青田を一望に
小袖

至近距離なる片蔭にバスを待つ
せいじ

曖昧な道案内に汗滂沱
たか子

竹皮を脱ぎ散らしたる藪小径
宏虎

定例会みの選

二〇一六年六月二一日(参加者一三名)